



第85回日本皮膚科学会東京支部学術大会  
アフタヌーンセミナー ①

85th JDA Tokyo, 2021

# 患者満足度向上を目指した アトピー性 皮膚炎治療



2021. **11.13** 土  
14:50-15:50

**第1会場** | 京王プラザホテル 5F  
エミネンスホール

〒160-8330 東京都新宿区西新宿2-2-1

▶ 現地開催とWEB配信によるハイブリッド開催

講演

1

## アトピー性皮膚炎における 治療目標設定の重要性と患者指導のコツ

**座長** 秋山 真志 先生 名古屋大学大学院 医学系研究科 皮膚科学分野 教授

**演者** 乃村 俊史 先生 筑波大学 医学医療系 皮膚科 教授

講演

2

## アトピー性皮膚炎治療UP to DATE

**座長** 井川 健 先生 獨協医科大学 皮膚科学講座 主任教授

**演者** 三井 浩 先生 東京通信病院 皮膚科 部長

第85回日本皮膚科学会東京支部学術大会は現地とWEB配信どちらからでもご聴講いただけるハイブリッド開催となりました。COVID-19流行状況により変更になる可能性がありますので、最新情報を下記WEBサイトよりご確認ください。

第85回日本皮膚科学会  
東京支部学術大会WEBサイト <https://jdatokyo85.jp>



本セミナー・ご講演に関するお願い

本セミナー・講演中の録音、録画、カメラ撮影、スクリーンショットはご遠慮ください。また、不正に撮影された写真等をインターネット（Twitter等）にアップロードすることも禁止させていただきます。ご理解、ご協力の程、よろしく願い申し上げます。





講演

1

## アトピー性皮膚炎における 治療目標設定の重要性と患者指導のコツ

演者 **乃村 俊史** 先生 筑波大学 医学医療系 皮膚科 教授

アトピー性皮膚炎(AD)は、増悪と軽快を繰り返すかゆみを伴う湿疹性病変を特徴とする慢性の炎症性皮膚疾患である。先進国では学童の約10-20%が罹患し、喘息や鼻炎、食物アレルギーなどの他のアトピー疾患を合併しやすい。ADの病態には、皮膚バリア機能の低下や皮膚細菌叢の異常、発汗異常、かゆみ、Th2型優位の免疫応答などが関与している。中でもかゆみは「itch scratchサイクル」としてかゆみと搔破の悪循環を生じさせるため、難治で厄介な症状であり、QOL低下の要因となっている。さらに頻回に増悪と軽快を繰り返すことで治療の努力が報われない場合には患者アドヒアランスを低下させ、期待する治療効果を得られていないケースも存在する。アドヒアランス向上のためにも患者の症状を把握し、望む治療ゴールを医師と患者で共有することは非常に重要であり、治療満足度の向上にもつながる。近年、症状を把握するためのPOEMやVASといった患者報告アウトカム(PRO評価)が使用されている。本セミナーでは患者の症状を把握するためのPRO評価の導入と治療目標や治療計画の共有における患者指導のコツについて紹介する。

▶ご略歴

2002年 3月 北海道大学医学部医学科卒業  
2008年 2月 University of Dundee 研究員  
2010年 9月 北海道大学病院皮膚科 助教

2016年 9月 北海道大学病院皮膚科 講師  
2020年11月 筑波大学医学医療系皮膚科 教授



講演

2

## アトピー性皮膚炎治療UP to DATE

演者 **三井 浩** 先生 東京通信病院 皮膚科 部長

アトピー性皮膚炎(AD)は慢性的なかゆみを伴う皮膚疾患で、日常診療で頻繁に遭遇する。ADの病態を表す3要素として、皮膚のバリア障害・アレルギーの異常・かゆみの異常が挙げられるが、背景にはTh2をメインとした免疫学的機序が考えられている。特にかゆみは患者にとって最大の悩みでありQOL低下の要因となっている。かゆみは患者の主観によるものであり、かゆみの症状を拾い上げるにはコツが必要である。近年ADの病態に基づく様々な治療薬が開発されており、ここ2、3年ではIL-4、13に対する生物学的製剤やJAK阻害剤など全身療法が新しく上市されている。現在多くの治療法が選択できるようになっているが、ADに対する基本的な治療はやはり外用療法であり、外用療法を工夫して行えばADの多くはコントロール可能である。全身療法による治療においても外用療法の継続はキーとなる。本セミナーでは、AD診療ガイドライン2018に基づいた標準治療について、ADの治療の変遷と外用薬の効果的な使用方法、最大の悩みであるかゆみを評価するコツを紹介する。

▶ご略歴

1996年 3月 東京大学医学部医学科卒業  
2003年 3月 東京大学大学院医学系研究科外科学卒業  
2003年 4月 帝京大学医学部附属病院皮膚科 助手  
2004年 7月 国立国際医療センター厚生労働技官  
2006年 8月 National Institutes of Health,  
Department of Dermatology 留学

2009年 4月 東京大学医学部付属病院皮膚科 助教  
2010年 4月 東京大学医学部付属病院皮膚科 講師  
2011年 4月 聖マリアンナ医科大学病院皮膚科 講師  
2013年 4月 同愛記念病院皮膚科 部長  
2019年 4月 東京通信病院皮膚科 部長

